

## お茶大を去るに当たって

浅海重夫

長かったお茶大の職場をいよいよ去るときが来た。昭和20年代の初期に旧制大学さいごの卒業生となった私は、その数年後に大学の教職につき、いま大学生生活二度目の卒業を迎えることになる。

東大の地理学科に入学する少し前に、学科主任辻村太郎先生を訪ね、高等学校山岳部時代に撮った北アルプスの写真を見ていただいたところ、三俣連華から双六岳あたりのカール地形をひとつひとつ説明され、氷河をやるようにとすすめられた。地理学科に入る意志をかためたのはその時であったが、地質学から派生した地形学がなぜ地理学なのかという疑問をもちつつ、ともかく先生の「新考地形学」を一生懸命読んだ。しかし上野の山で氷河の擦痕礫を探す羽目となり、氷河地形をつづける気持ちを失ってしまったのは後日の話である。農林省農事試験場に就職してから約5年間、土壌調査区設定と土壌図作成のための地形分類の課題にとりくんだが、それが土壌研究に出てくるカテナの考えの実用面への応用になるらしいことにしばらくして気がついた。しかし地形と土壌の関係を実証できないままにお茶大に移り、始めてここで土の分析を手がけるようになった。分析実験の手法は女子学生に向いているとの松井勇先生のすすめと、地理に土壌は必要なベースだという飯本信之先生（当時主任）のこぼしに支えられてきた。

以来土壌地理学なる分野への指向を定め、講義題目もそれまでの「土壌学」から「土壌地理学」と変更したり、「自然地理学実験」の時間で野外の土壌観察と採取を行い、農業土地利用との関連課題をとり上げるなどを試みた。卒論・修論のテーマに土壌を選ぶ学生も少数ずつ現れてきた。

講義は不得手だったが教職にある以上そうは云ってられない。しゃべることによって新たな考えが浮かぶこともある。学生時代の大学で当時助手だった木内信蔵先生が「教えなければ覚えませぬね」と云われていたことを覚えている。講義ノートをキチンと作らずメモだけを頼りにしてしゃべっていたので、毎年同じようには講義が進まず、話がつづかなくなったりして困るのだが、このくせはついに直らなかった。

巡検は昭和40年代までの全クラス、50年以降は1～2年おきに担当したが、宿泊巡検で各クラスカラーの違い、学生の個性的特色が感じられるのは地理学科ならではのよい面である。

今、私には反省材料が多すぎることをじゅうぶん承知している。まず、文教教育学部に属する地理学科には自然地理を志向する学生が元来まれであること。地理学は自然と人間のかかわりを論ずる学問との一般的理解にもかかわらず、自然の面には興味を示さない人が多数である。その一般的状況にもっと早く眼を向け、なじむべきだった。また、試験の実施やその採点評価による教育の慣行にもなじまず、教師としての基本的素質に欠けていること、教壇での講義が生理的に苦痛の多い体質であること、学生の名前を覚え(られ)ず顔もよく見(られ)ないこと等々。そしてそれらが次第にエスカレートしてきたのも事実だ。迷惑をかけどおしの授業であり指導であったことへの反省が最も深刻である。しかし、一人でも聴いてくれる学生があり、一人でも理解して同じ道を歩いてくれる者があれば、自分の存在は無意味ではなかったと思う。